

「コロナ後遺症」徳島県内で相談急増 8月 184 件、7月の4倍近く 外来担当医師は診療体制拡充求める

9/5 徳島新聞



後遺症外来で症状を訴える患者を診察している大串院長＝徳島市の博愛記念病院（徳島新聞）

新型コロナウイルスの流行「第7波」で感染者数の高止まりが続く中、徳島県内で後遺症を訴える人が急増している。徳島県が設けた専用相談窓口では、8月の相談件数が184件で、7月の4倍近く増えた。後遺症外来を担当する医師は、感染拡大に伴い患者数の増加が見込まれることから、診療体制の拡充と一層の感染症対策を求めている。

徳島県の「コロナ後遺症相談窓口」は、4月から毎日24時間態勢で電話対応している。相談

件数は4月37件、5月40件、6月26件と、感染状況が比較的落ち着いていた時期は少なかったが、第7波の到来とともに増え始め、7月は前月から倍増して51件に。1日当たりの感染者数が何度も過去最多を更新した8月は200件に迫った。

窓口には「せきが続いて苦しい」「体がだるいのでどこか病院を紹介してほしい」といった相談がある。徳島県感染症対策課は「陽性者数に比例して増えている。9月も8月と同じぐらいの相談が来るのではないかと懸念する。

2021年5月に後遺症外来を開設した徳島市の博愛記念病院では、患者数が21年12月までに45人だったのに対し、オミクロン株が流行した22年1～5月は178人と急増。6月は14人、7月は17人と減っていたが、8月は58人と一気に増えた。

外来を担当する大串文隆院長（70）によると、以前は味覚や嗅覚障害を訴える患者が全体の3割ほどいたが、オミクロン株が主流に置き換わって以降は減少し、代わりに喉の痛みやせき、けん怠感を訴える人が増えた。年齢は40～60歳までの中年層が4割ほどを占めているという。療養期間を終えてすぐの、まだ症状が後遺症かどうかははっきりしない時期に来る患者が目立ち、大半が軽症で数回の通院で済んでいる。大串院長は「宿泊施設や自宅で療養中は誰も診てくれない。療養後もどうなるか分からず、不安を募らせて受診する人が多いのだろう」と話す。

徳島県や徳島県医師会では徳島県内に後遺症外来がある病院の全数を把握しておらず、患者はどの病院を受診すればいいのかわかりづらい。後遺症の症状は筋力低下や息切れ、関節痛など多岐にわたるが、一般診療で対応可能な場合も少なくない。県外など遠方から来る患者もあり、大串院長は「より多くの病院で患者を診られるようにすべきで、理想的なのは全ての診療科でタッグを組んで診るようにすること」と述べ、体制拡充の必要性を強調。併せて「まだ治療法が分かっていない病態もある。後遺症に悩まなくていいよう、感染症対策を徹底してほしい」と呼び掛けている。